

「米水津」考

高宮 昭夫

(会員 米水津村浦代)

米水津という地名の村に生を享けて約七十年、その地名の由来について、とりたてて考えることもなしに、生きて来た。

又、考察しなければならぬという必然性もなかったのが本音である。

ところが、最近になって「KBC」（九州朝日放送）、「NHK」、「OBS」、将又、大分合同新聞から、米水津の地名について問い合わせがあった。

「KBC」のそれは、司馬遼太郎の「街道ものがたり」の一環であったり、「NHK」は「県下の地名探険」、大分合同新聞は町村合併に係る、「町村」誕生秘話によるものであった。

地名について

そもそも「米水津」なる地名を、当初から「よのうづ」と読む人は無いと断言出来る。なぜならば「米」を「よね」と読むことはできても、「水」を「う」とは発音出来ないからである。「津」は「港」を意味するから、問題はない。

私も、米水津の役場に約四十年勤務したが、県庁からの文書に「米入津」や「米津」があったのを記憶している。又、電話では、「よにようづ」や「よねうづ」で発言しにくそうであった。

先般、直川村に文化財研修に行った時、直川湧水の説明板に、この土地で以前「米入津」の人が旅館を経営していたとあった。今でも「米水津」は「米入津」かと苦笑すると共に、町村合併を間近にひかえた昨今、情けなくもあった。

さて、皆さんご存知のように、大分県の難解固有名詞の中の最たるものに「安心院」と「米水津」があるが、「安心院」の場合は、私の知人でも安心院さんという人がいる（姓の場合は「あじみ」と読む）。しかし、「米水津」という姓は聞いたことがない。

冒頭に記したように、生地でありながら考えたこともなく、村外の人々から、何故、米のないのに「米水津」かと尋ねられたら、知りませんと答えるのは情けない。

そこで私は、「米水津」という地名については、

「神武天皇」説と「弥入津」説がある、

と答える。

「神武天皇」説とは、神武天皇、東征の砌、米と水を積んだ説であるが、佐伯市木立と米水津との境に「元越山」という六〇〇米弱の山がある。これを米水津の人たちは「元越山」と呼称せずに、「バイノウ」という呼び方をしている。なぜ「バイノウ」かというと、私は「米納」が訛つてのバイノウだと思ふ。「米納」、これは「神武天皇」に米を献上するために、百姓が隣村からこの米納山を通つて、米水津村に米を運んだと考えられるからである。

「米納」の近くには、「神武方原」という地名も残つており、佐伯市木立小学校の「校歌」の一節に、南の空の「神武代」というものもある。地形的に「米納」が南の空となるのであろう。蒲江町の畑野浦という地には、「伊勢本神社」や「江武戸神社」という神武天皇を奉った神社もある。神武天皇伝説は、日向の「美美津」から始まつて

あちこちにある。美美津の場合は、神武天皇出立の時に住民が「餅」を搗いて献上しようということになつてしたが、海上の波が静かになつたので、天皇急に出立を思い立つた。そこで住民はあわてて、各家の「戸」をたたいて人々を「起きよ」「起きよ」と言つて起こし、充分に煮ていながつた「餡子」で餅を作つたという。美美津の伝統行事の「おきよ祭」は現在でも行なわれている。

もう一つ、神武天皇出立の折に衣の「綻び」に気づいた民の少女に、天皇立つたまま縫わせたというので、美美津は「立縫の里」とも呼ばれ、現在でも美美津の伝統舞踊として「立縫の舞」というのがある。

「細島」は、天皇の銚から出来た「銚島」が転化して細島になつたと、太平洋戦争 酣たげなわの昭和十八年に、久留島武雄の書いた「神武天皇東征記」にある。では、米水津の「水」はと問われると、米水津に「居立」という地名があり、そこは海岸の汀さに直径約八十センチ位の臼型になつた松の空洞から、真水がコンコンと湧き出ているのであり、いわゆる神武天皇が「矛」で突いたというものである。佐伯市大入島の「神の井」も同様の伝説であるが、神武天皇東征であるから「神の井」よりも、米

水津の「居立」の方が先かも知れない。

海岸線の神武天皇伝説は、佐賀関にもある。又、宇佐にもあり、大変興味深い。

さて、私の手元に「大政紀要」という本がある。大正元年、宮内省発行のもので、編さん委員に「秋月新太郎」の名も見える。この本の末尾には、神武天皇以降、大正天皇までの年令が書かれている。国民学校入学の私などは、二、三年生の時に覚えたものであろう。ジンスム・スイセイ・アンネイ・イトク・コウシヨウ……とオオジンぐらゐまで、今でも暗誦が出来る。

その年令たるや面白い。神武天皇七九年・垂仁天皇九年・考安天皇一〇二年と、随分高齢である。そこで、神代の時代といわれる三十二代崇俊天皇まで一二五三年経っているので、三十二で割ると、一代が三九・二年となる。三十三代、推古天皇から昭和天皇まで一三九六年であり、この間九十代の天皇が即位していたから、一三九六年を九十で割ると、一代が十五・五となる。因みに、わが村の養福寺は開基以来四二一年に和尙三十二代であるから、十三・一年である。

「米水津」の所見は、
たとと写真のとおり。

三月七日、惟定の感状は
天正十五年（一五八七）のものである。最後の行は、
米津衆中と書いている。四
百十七年前のものであるか
ら、「米水津」の地名は、
約四百二十年以前に往時の
知識人が、美津津から宇佐
までの海岸線の神武天皇伝説を考慮しながら、「米水津」と命名したものだというのが私の結論である。

次の文章は私見ではなく、わが佐伯史談会の大先輩であり、米水津村出身の山田平之丞先生の引用文である。

『米水津なる名称の意義については、神武天皇東征の砌り此の地に於いて、米と水を補給したるにちなみであるとの伝承あれども、これは後人の牽強^{けんきやう}付会^{ふかい}（都合のよいようにこじつけること）なるべし。

佐藤鶴谷（佐藤佐伯市長祖父）によれば、「ヨノウヅ」



は弥入津より転訛せるものならんか。此浦は入津湾に続ける入海にして、入津湾、米水津湾は互に相接したり。ヨノウツはニユウツに対する称呼にして、湾又湾の意味より、弥入津と呼びたりしを、ヤ、ヨ国音相通ずるにより、弥入津をいつしかヨノウツと呼び倣し、米水津の仮字を用いたるなるべし。」と

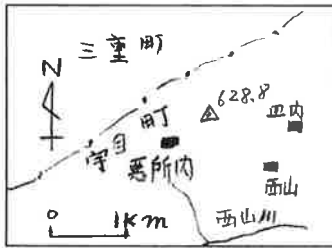
地名のルーツ

◆悪所内（あくしようち・宇目町）

宇目町の木浦内にある小村で、現在三戸（昔は七戸あった）の民家がある。地区の西側に小川が流れており、

その奥には熊野社という神社があり、小川を渡るとすぐ民家が並んで建っている。

宇目町誌によると、十六世紀後半の大友氏と島津氏の争いに際して宇目郷は大友氏が国を守るための南の重点拠点であったことが記述されており、山を隔てた隣の皿内城跡



▲見るからに険しそうな山。名前のルーツをうかがわせる。



▲かつては、小さな田んぼと石垣ばかりで、農作業も大変だったとか。

があり、この争いの際に、要害設置場所（土地が険しくて、防備に都合が良い所・とりで）として『悪所内塞（とりで）』の検討をしたところとある。

悪所内に住む人の話によると、「この地は古くから、竹田との交通の場所であり、おそらく土地の険しさからこの名前が付いたのでは」という。つまり、皿内城をすぐ隣に控えるこの地区は、砦（とりで）を設けるにふさわしい険しい土地柄であったことから、この名前が付いたのかもしれない（写真・引用資料は『うめ町報』平成十三年十月号、地図は矢野）。